

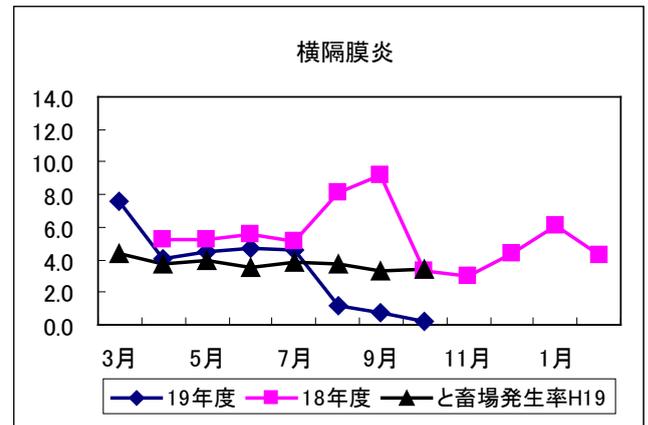
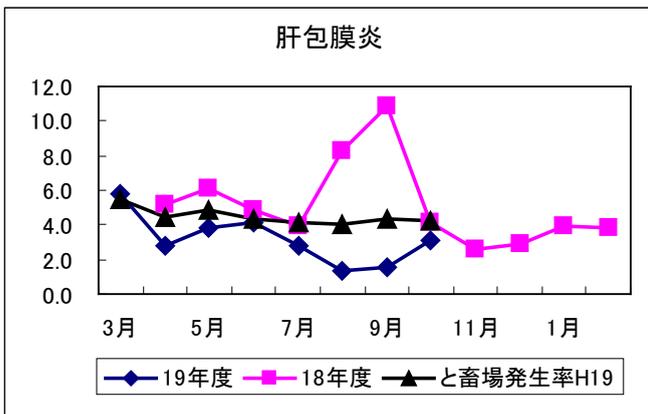
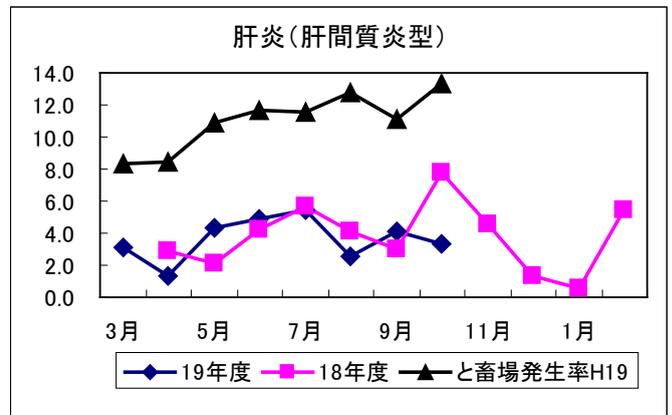
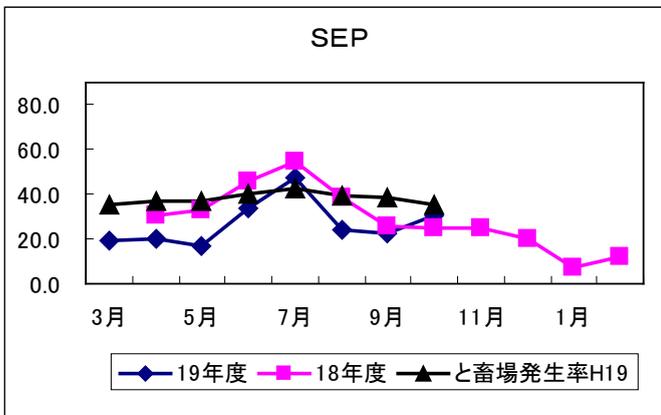
屠場検査成績を疾病対策に役立てよう

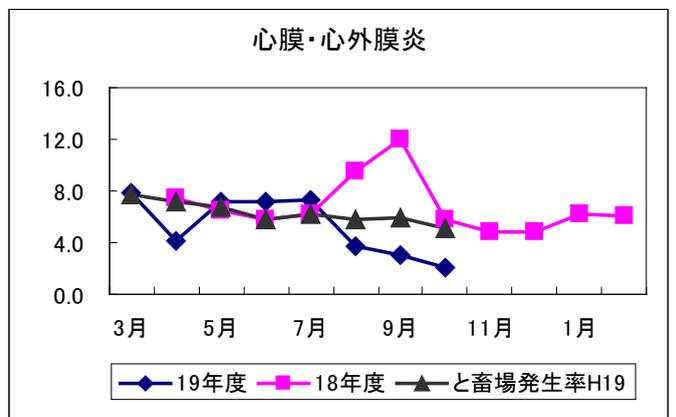
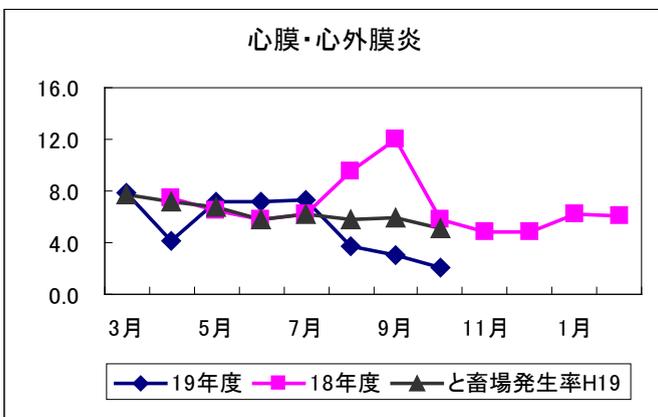
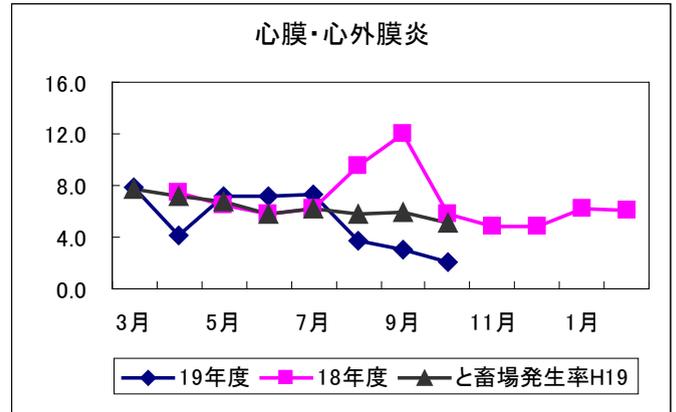
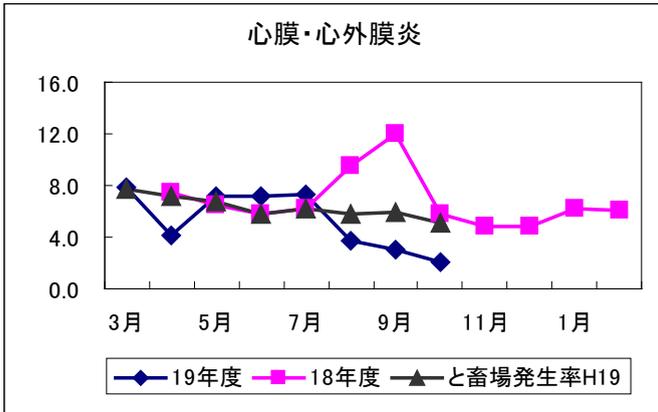
マルナガファーム 加地 肇

事例として紹介する農場は、南九州の800頭一貫経営農場です。南九州の養豚と言えば、何か特別な疾病があり、事故率も20~30%強の農場が殆どのように言われています。確かに、私も南九州の養豚地帯を回ってみますと、死亡した豚が農場の片隅に雑然と放置されている状況をよく目にします。その死亡した豚の教訓を解剖するなり、病性鑑定に出すなりして生かされれば何も言うことはないのですが、多くの農場では従業員が無造作に片付け、処理業者に処理をして貰っているのが現状のようです。

私は、この農場を訪れたときには、必ず、死亡豚の解剖を従業員の皆さんと共に行い、肺が悪いね、肝臓が退色しているね、胃の中に何も無いね、腸管リンパが腫れて、充血しているねと話し合いながら、この豚は何々の疾病の疑いがあると診断します。このようにして従業員に死亡豚の原因に興味を持たせることにより、私がいなくても、最近では、解剖し、私に何々が異常でしたと連絡をいただきます。共に解剖したときには、先日死亡した子豚を解剖したら、今日とまったく同じ所見でしたと話してくれます。従業員が死亡豚に対して危機感を持ち、何故だろう、如何してだろうと考えるようになると、豚の観察の目も鋭く、処置も早くなり、事故豚も昨年に比して6%強減少しました。

屠場での疾病検査成績を病状ごとにグラフに表し、農場事務所に張り出し、全従業員に関心と疑問を持ってもらうようにしています。





グラフから次のような疾病浸潤度、蔓延度等を知ることが出来ます。

- ① マイコプラズマ(SEP)の感染状況は多く、更なる対策が必要なこと
- ② 胸膜炎、心外膜炎、化膿性肺炎が著しく右肩下がりを示していることは、APP感染が昨年に比して著しく減少しているのではないかとということ
- ③ 肺炎、肝包膜炎、横隔膜炎の減少はグレーサー病の感染も減少しているということ
- ④ 間質性肝炎の推移から寄生虫対策が不十分なこと等

血液検査や糞便検査は、その時点の、その豚のデータでしかないのですが、食肉検査データは、健康な豚として出荷された全ての豚の状況が、日々、毎月生きたデータとして帰ってきますので、農場の衛生管理対策をプログラム化する上で重要なデータの一つではないかと思えます。(此処の農場でこのデータのことを尋ねますと、徐に、書類箱の片隅から出して見せてくれます。まだ出してくれる農場は良いほうで、確かに、送ってきたことは覚えているのだが何所にやったかな。殆どの農場で役に立っていないのが現状のようです。)

このデータ整理がされていれば、例えば、ワクチンは、何と何の疾病対策に重点を置くかにより種類の選定、接種時期等を、データから方向を見つけることが出来ます。

抗菌剤も疾病対策の目的により種類の選定選択、投薬時期、投薬期間を再検討し、より有効で適切な投与が出来るようになります。

飼育環境については、温度、湿度、換気、密飼のチェックのみでなく、疎かにされがちな豚舎、豚房の消毒が重要なことを再認識させられます。

このデータを基に消毒薬剤の選定選択、消毒の方法を見直す材料にもなります。

例として上げました、この農場でのことです。2年間も肉豚舎に導入すると、1週間後に必ずといっていいほど下痢が発生し、何もしなくても4～5日で治癒していました。しかし、下痢による体力の損耗と発育の障害により、経営管理上、大きなマイナス要因になっていました。この下痢も消毒薬の変更と消毒方法の変更で、もの見事に発生がなくなりました。日常の管理の上で当たり前のように実施されている消毒一つとっても疎かに出来ないことをいやと言うほど教えられました。

色々記しましたが屠畜検査データは、生きたデータでもあり、日々更新され、農場の疾病の種類、浸潤度、蔓延度を知る上で貴重なデータではないかと思えます。

是非、屠畜検査データをグラフ化し、誰にでも理解でき、解るような工夫をしてください。(農場に張り出すと良く目に付きます)

このデータを農場の疾病対策に役立て、事故率低下に結びつけることにより、足腰の強い養豚場経営に役立つものと思っています。